

報告

大学進学における相談相手の選択に関する日中比較研究

A comparative study on the selection of Advisers about University Admissions between Japanese and Chinese High School Students

林如玉¹, 倉元直樹¹

Ruyu Lin¹, Naoki T.Kuramoto¹

¹東北大学

¹Tohoku University

本研究の目的は、高校生の大学進学に関して様々な相手との相談頻度を調査し、日中両国の高校生の大学進学における相談相手や相談傾向の異同について明らかにすることである。質問紙調査を用いて異なる相談相手との進路に関する相談頻度を求めた。相談頻度の回答から分析した結果、日本の生徒は主に「母親」「高校教師」「友人」「父親」を大学進学の相談相手として選択していた。一方、中国の生徒は主に「友人」「母親」「父親」「兄弟姉妹」と相談していた。「高校教師」の位置づけに違いが見られた背景要因として、両国の高校の進路指導体制の差が考えられる。さらに、クラスター分析を用いて相談傾向のタイプ分類を行った。日本の高校生は「相談なし型」「塾・家庭教師型」「標準型」「先輩・友人型」に分類された。中国では相談傾向による分類はできなかった。「その他の家族・親戚」は、中国では「高校教師」、日本では「その他の家族・親戚」と近接していた。背景要因として、両国における文化の違いが考えられる。

キーワード: 高校生, 大学進学, 日中比較, 相談相手

問題

文部科学省の「学校基本調査」によれば、2019年度の日本の高等教育機関（大学・短大）進学率は58.1%で過去最高に達した。また、中国の教育統計年鑑によれば、2018年中国の高等教育機関（大学・短大）進学率も48.1%に達している。両国の高等教育が大衆化した現在、数多くの高校生は卒業後、大学進学を選択する。これらの高校生にとって、進学先の選択は重要な課題である。

大学に関する情報を集め、いくつもの意志決定を経て進学先の決定がなされていくという進路選択プロセスの中で、他人からの影響は無視できない要素の一つである。高校生の相談相手の選択という角度から他人からの影響の分析を試みる。

中国で行われた大学選択に関する研究としては、尤(2014)が挙げられる。尤が高校生を対象にインタビュー調査と質問紙調査を行った結果によれば、保護者と友人の中の大学生が高校生の進路選択に大きな影響を与える、とされている。この研究では、高校生の大学イメージ形成の情報源に関して検討しているが、検討対象となったのは保護者と友人のみで、その他の相談相手については検討されていない。

日本の高校生の大学進学決定要因ならびにその人的影響源に関する研究には、淵上(1984)の研究がある。淵上は県立普通高校の進学希望者で高校3年生を対象として特定大学への進学希望動機を分析し、特定大学への選択動機がどのような人的影響源から影響を受けたかについて検討した。その結果、「父親」、「母親」、「友人」が、その順で影響源としての出現頻度が高かったとされる。淵上の研究は、様々な相談相手について検討していたものの、調査時点から大学入試の環境は激変した。今の時代における高校生の相談相手がどのように変化したかという視点は重要だと思われる。そのほかに、全国高等学校PTA連合会による高校生と保護者の進路に関する意識調査結果報告(PTA, 2019)では、高校生の82%は進路について保護者と「よく話をする」と「時々話をする」と回答していた。

その他、進路相談相手に関する研究として、ベネッセ教育総合研究所(2005)による大学生を対象とした進路選択に関する振り返り調査がある。同報告書では、進路選択する際に意見を参考にした相談相手として「高校教師」「母親」「学校の友人」「父親」「塾や予備校の先生」「学校外の友人」「部活などの先輩」「年長の知

人」「きょうだい」の9項目が挙げられていた。

日本において、大学進学における相談相手とその影響を分析した先行研究は存在するが、様々な相談相手との相談頻度を詳細に分析した研究は見当たらない。また、中国の高校生との比較を行った研究も存在しない。相談する主要な相手の違いによって、重視する大学情報や大学決定要因に違いがある可能性もある。なお、頻繁に相談する相手の違いについて、本稿では「相談タイプ」と呼ぶこととする。

目的

本研究の目的は大学進学における相談相手との相談頻度を分析することである。また、そこから、日中の大学選択活動における相談相手と高校生の相談タイプの異同について明らかにすることである。

方法

2.1.調査方法

本研究は主に質問紙調査法を用いて研究を行った。日本調査は2019年2～4月に日本全国11校の高校生を対象に、ウェブにおけるアンケート調査を行った。中国調査は2019年6～8月に中国河南省¹⁾における6校の高校生を対象に実施した。日中両国で調査対象となった高校は、日本でいうところのいわゆる進学校や上位進学校レベルの高校である。

調査時期は両国の一般入試(当時²⁾)の時期と大学の入学時期によって設定した。日中両国の一般入試と入学時期は表1に示す。調査時期は、両国の3年生が進学する大学を決めていく時期である。

表1 日中一般入試と大学入試時期

	一般入試時期	入学時期
日本	1～3月	4月
中国	6月	9月

日本調査の実施は各高校の担当教員に依頼し、QRコードが掲載された「研究協力をお願い」を調査対象者に配布した。中国調査は中国在住の協力者を通じてQRコードを調査に協力する高校教員に知らせ、協力者から調査対象者にSNSを通じて調査を依頼した。両国とも調査サイトへのアクセスは任意とした。ウェブ調査の冒頭に調査内容及び倫理的配慮を説明する「研

究同意書」を提示し、同意した者のみに回答を求めた。

なお、本調査は東北大学高度教養教育・学生支援機構で論理審査委員会の承認を得て実施したものである。

2.2.調査内容

調査票のうち、本報告で分析に用いた変数は以下のとおりである。最初に性別、学年について選択式で回答を尋ねた。学年に関して、日中の学期開始時間が違うため、質問紙の冒頭に両国の学年暦に合わせて「2018年4月から2019年3月(日本)」「2018年9月から2019年7月(中国)」という調査対象となる時期に関する全般的な指示を示した。

相談相手については、両国の状況に合わせて「父親」「母親」「兄弟姉妹」「その他の家族・親戚(祖父母も含む)」「高校教師」「家庭教師・塾・予備校」「先輩」「友人」の8項目を設定した。相談頻度については、調査対象とした「1年間」で進路について各相談相手と「相談した頻度」を「①1回もなかった」「②1～2回ぐらいあった」「③時々あった」「④頻繁にあった」の4段階評定として回答を得た。

日本語で作成した質問紙をバックトランスレーション法を使い中国語版を作成した。日中両国で使う質問紙は同一内容のものである。

結果

3.1.有効回答者数

本報告で分析に用いた項目は、学年、性別と相談相手に関する項目である。データクリーニング後の中国の有効回答者数は192、日本の有効回答者数は1,019であった。性別、学年の度数を表2に示す。

表2 性別と学年の度数表

		国		合計
		中国	日本	
性別	男子	71	440	511
	女子	121	578	699
学年	1年生	48	437	485
	2年生	58	423	481
	3年生	86	159	245

注:無回答を除く

3.2.相談頻度から見る相談相手の選択³⁾

上述のように、相談頻度に4段階を設置した。分析

する時は各相談相手について「1回もなかった」を「1」、「1～2回ぐらいあった」を「2」、「時々あった」を「3」、「頻繁にあった」を「4」と得点化して分析を行った。両国各相談相手との相談頻度の平均値と標準偏差を表3、表4に示す。得点「1」の定義は「1回もなかった」であるため、平均値が「2」未満の項目は、基本的に相談相手としては選ばれていないと言える。

日本の高校生は「母親」「高校教師」「友人」「父親」の順で頻繁に相談していることが分かった。「家庭教師・塾・予備校」「先輩」「兄弟姉妹」は基本的に大学進学における相談相手として選択されてなかった。一方、中国では「友人」「母親」の順位が高く、次いで「父親」「兄弟姉妹」「高校教師」「先輩」であった。「その他の家族・親戚」「家庭教師・塾・予備校」は大学進学における相談相手として選択されていなかった。

両国における相談相手との相談頻度に関するその他の分析は、林・倉元(2021)を参照のこと。

表3 相談頻度の平均と標準偏差(日本)

	度数	平均値	標準偏差
母親	1017	3.04	0.86
高校教師	1010	2.52	0.86
友人	1009	2.46	1.01
父親	1002	2.30	1.02
家庭教師・塾・予備校	994	1.66	1.01
先輩	999	1.53	0.81
兄弟姉妹	985	1.52	0.85
その他の家族・親戚	996	1.44	0.75

注:無回答を除く

表4 相談頻度の平均と標準偏差(中国)

	度数	平均値	標準偏差
友人	192	3.06	0.99
母親	192	2.92	1.05
父親	192	2.61	1.08
兄弟姉妹	192	2.41	1.14
高校教師	192	2.14	1.08
先輩	192	2.02	1.04
その他の家族・親戚	192	1.85	0.92
家庭教師・塾・予備校	192	1.71	0.97

3.3. 高校生の相談タイプ

相談相手の選択傾向によって調査対象者を「相談タイプ」に分類するため、ウォード法によるクラスター分析を行った。

日本における相談相手の項目得点を用いたデンドログラムから、四つのクラスターに分類することが妥当と判断した。4群それぞれの特徴を図1に示す。

まず「グループ1」に関しては、他のグループと比較して相談頻度が全体的に低いので、「相談なし型」と命名した。

「グループ2」は、他の群と比較して「家庭教師・塾・予備校」とは高い頻度で相談するという特徴がみられた。したがって、「塾・家庭教師型」と命名した。

「グループ3」は、右上に少し偏っているが、他のグループに比べて全体的として特徴がないため、「標準型」と命名した。

「グループ4」は、他の群と比較して「友人」「先輩」とは高い頻度で相談するという特徴がみられたため、「先輩・友人型」と命名した。

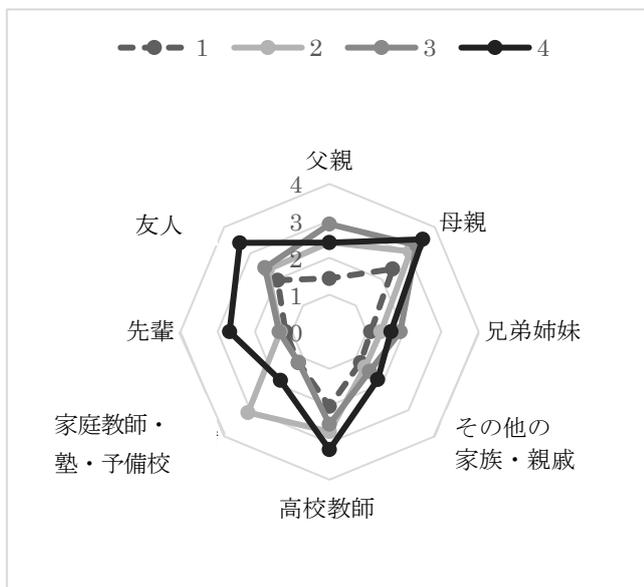


図1 各グループにおける各相談相手の平均値 (日本)

次に、各群の性差と学年差を見るため、クロス集計表を作成してカイ2乗検定を行った。相談タイプと性別の関連は有意ではなかった。

相談タイプと学年のカイ2乗検定の結果は有意であった ($X^2(6)=22.961, p<.01$)。残差分析 (5%水準) の結果、「相談なし型」では、1年生の比率が3年生に比べて有意に高かった。「先輩・友人型」では、3年生の比

率が1年生に比べて、有意に高かった。

中国データにおいても同じように相談相手の項目の得点について、ウォード法によるクラスター分析を行った結果、三つのクラスターに分類された。クラスターの特徴を図2に示す。ここから三つのグループは相談頻度の高さによって分類されたことが分かる。したがって、中国データを相談傾向として特徴のあるクラスターに分類することは難しいと判断された。

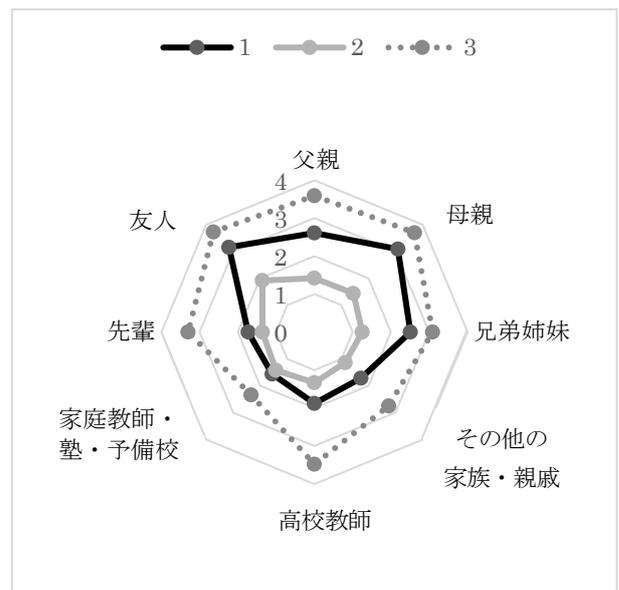


図2 各グループにおける各相談相手の平均値 (中国)

3.4. 相談相手項目の特徴

相談相手に関する日本データのデンドログラムを図3に示す。「父親」「母親」「高校教師」「友人」が一つクラスターで、これは表3での頻繁に相談する相手の上位4項目と対応している。他の項目「兄弟姉妹」「その他の家族・親戚」「家庭教師・塾・予備校」「先輩」がもう一つのクラスターを形成している。

中国データのデンドログラムを図4に示す。中国においては「父親」「母親」「兄弟姉妹」「友人」が一つのグループで、このグループは表4における頻繁に相談する相手の上位4項目と対応している。もう一方は「その他の家族・親戚」「高校教師」「先輩」「家庭教師・塾・予備校」となっている。

日本データ (図3) では、「その他の家族・親戚」は「先輩」や「兄弟姉妹」と近接している。一方、中国では「その他の家族・親戚」は「先輩」の他、「高校教師」に最も近い。

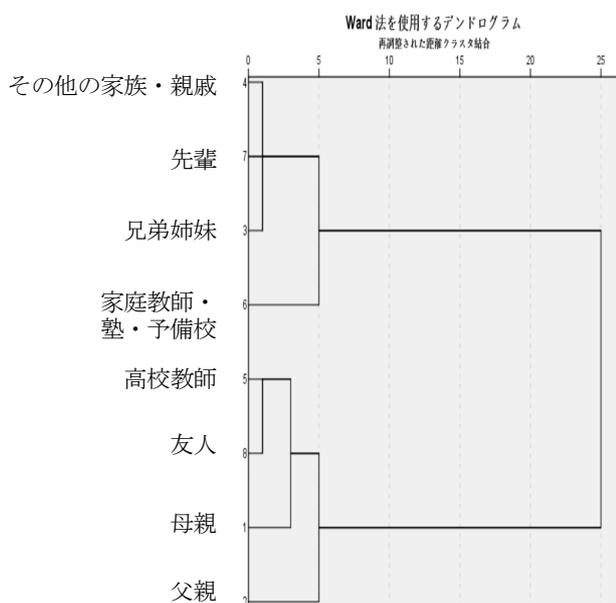


図3 日本データの相談相手のデンドログラム

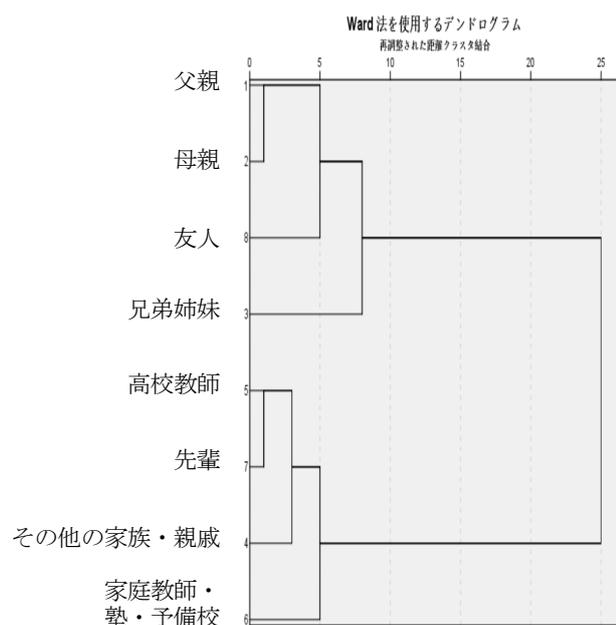


図4 中国データの相談相手のデンドログラム

考察

両国における相談頻度の平均値と相談相手項目のクラスター分析から、大学進学における相談相手の選択に関する日中の高校生には違いが見られた。

日本の高校生はおもに「母親」「高校教師」「友人」「父親」を大学進学の相談相手として選択し、これらの相談相手と高い頻度で相談していることが分かった。

一方、中国で頻繁に相談する相手には「友人」「母親」「父親」「兄弟姉妹」であった。「高校教師」「先輩」も相談相手として選ばれてはいたが、頻繁に相談する相手ではなかった。上記のことから、相談相手に関する日中の差は主に「高校教師」と「兄弟姉妹」項目にあると言える。

日本の「高校教師」は頻繁に相談する相手に分類されたが、中国の「高校教師」は頻繁に相談する相手ではなかった。理由として考えられるのは、日中における進路指導体制の差である。日本においては、各高校の組織形態には異同があるが、基本的に高校には進路指導を担当する組織が校務分掌として存在するのが常識である。一方、中国の高校では進路指導を担当する校内組織は存在しない。したがって、高校高校教師との進路相談は高校教師と生徒との個人的な関係性に依存することになる。さらに、先行研究においても中国の高校で進路に関する指導は十分ではないとの指摘がある(胡・村上, 2009)。なお、胡・村上の研究は職業選択に関する研究であり、本研究とは調査対象の母集団が異なることには注意が必要である。

「兄弟姉妹」に関しては、調査対象者に兄弟姉妹がいるかどうかを確認する調査項目がなかったため、背景要因の詳細な分析は難しい。「兄弟姉妹」の差に関する解釈は今後の課題と言える。

高校生の相談タイプから見ると、日中両国で違いが見られた。中国データからは、相談タイプの区別はできなかった。一方、日本において「相談なし型」「塾・家庭教師型」「標準型」「先輩・友人型」の4タイプが見出され、学年によって有意な違いが見られた。「相談なし型」の1年生は3年生より有意に多かった。その理由として、1年生の時は進学意識が希薄なために、特に誰と相談する必要性も認識していない者が多いのに対し、3年生になると大学入試の本番に近づくため、自分の進学先を選択するために頻繁に他者と相談する者が多くなっていくからだと考えられる。

大学進学の頻繁な相談相手としては選ばれていないが、「その他の家族・親戚」については両国で異なる特徴がみられた。デンドログラムでは、中国では「高校教師」と「先輩」、日本では「兄弟姉妹」と「先輩」に近い。「先輩」は共通しているが、もう一つが異なっている。背景要因として考えられるのは、中国では大学の選択は「家族」にとって大きな決断であり、親戚の中の権威者である大学教員ないしは教育関係者の意見を求める傾向があることが推測できる。一方、日本では「そ

の他の家族・親戚」は「いとこ」と理解された可能性があるのではないだろうか。

今後は、相談タイプが異なる高校生が大学を選択する時、重視する進路決定因子に違いがあるのか否か、等に焦点を当てて、分析を進める予定である。

さらに、今回の調査で調査対象者が実際に、塾へ通っているかどうか、兄弟姉妹がいるかどうか、ということが確認できなかった。今後、これらの質問を補って調査をする必要がある。

謝辞

本研究の調査は、JSPS 科研費 JP16H02051 の助成に基づく研究成果の一部である。

注釈

- 1) 河南省は中国の中部にある。2020 年国勢調査によれば、河南省の人口数は全国 3 位で、9,605 万人である。2019 年国民経済と社会発展統計広報によれば、河南省 2019 年の GDP は 54,259.20 億元であり、全国 5 位である。
- 2) 2021 年度入試から、「一般選抜」となっているが、本稿では調査当時の名称を用いる。
- 3) 林如玉・宮本友弘・倉元直樹 (2019) の発表では一部のデータに誤りがあったため、今回の報告ではその修正後の内容に基づいて報告する。

参考文献

- ベネッセ教育総合研究所 (2005). 平成 17 年度経済産業省委託調査進路選択に関する振り返り調査—大学生を対象として—. 株式会社ベネッセコーポレーション
- 淵上克義 (1984). 大学進学決定におよぼす要因ならびにその人的影響源に関する研究 教育心理学研究 32 (3), 228-232.
- 胡琴菊・村上隆 (2009). 中国の高校生における職業興味尺度の構成 キャリア教育研究 27, 35-42.
- 林如玉・宮本友弘・倉元直樹 (2019). 大学進学における進路選択プロセスに関する研究——進路決定因子と相談相手を中心に—— 日本テスト学会第 17 回大会発表論文集, 156-159.
- 林如玉・倉元直樹 (2021). 大学進学における相談相手の役割に関する日中比較研究——相談頻度を中心

に—— 東北大学高度教養教育・学生支援機構紀要 7, 2021 (投稿中).

文部科学省 (2019). 令和元年度学校基本調査(確定値)の公表について, 文部科学省 (Retrieved from https://www.mext.go.jp/content/20191220-mxt_chousa01-000003400_1.pdf, 2020 年 11 月 5 日)

一般社団法人全国高等学校 PTA 連合会・株式会社リクルートマーケティングパートナーズ合同調査 (2019). 「高校生と保護者の進路に関する意識調査」2019 年第 9 回報告書

尤斌 (2014). 大学形象与高中生择校研究. Doctoral dissertation, 华东师范大学

中国国家统计局 (2018). 2018 年中国教育統計年鑑 中国統計出版社